【宮城県】

宮城県農業高等学校

農業経営者クラブ
大泉陽奈

高校生ボランティア・アワード2023

＃太陽の蔵紅

1 村田町が消滅可能性都市に!!

村田町は、宮城県南部に位置し私が生まれ育った町です。蔵王の山に囲まれ自然が多いのが特徴です。

私は子供の頃から町の伝統でもある「菅の芽神楽」に参加している時に気が付いたことがあります。それは伝統を受け継ぐ子供いないということです。

町の人口をを調べると既に1万にを切り、いずれは人が居なくなり町の存続が危うい「消滅可能性都市」に指定されていました。

この現実を私は受け入れることができません。私はこの町が大好きです。他の人から見たら何処にでもある田舎であってもここは私の想い出が沢山あります。「この町を守りたい」私の活動がスタートしました。手始めに始めたことは町の歴史を調査することです。そこから、町の復活をかけた糸口が見つかると考えたのです。

菅の芽神楽

街並み

村田町

2 データで見る村田町

表1　人口推移

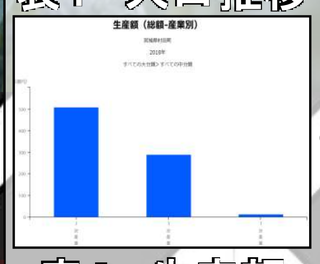
表2　生産額

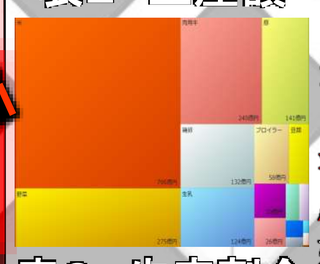
表3　生産割合

村田町の現状をデータで分析すると人口は1985年から下がり続け、高齢者割合は上がっていますが、3年後の2025年からは老齢人口も減少します。何も対策をしなければ確実に町は消滅します(表１)。町の生産額は1次産業がほとんどありません(表２)。繁栄を極めた農業自体全く機能してないことが分かります。少ない生産を行っている農業の割合を更に細かく分析しました。その結果が表３の生産割合です。なんと1位が米、2位が野菜、3位が肉用牛となり、紅花は皆無だったのです。紅花で繁栄を極めた村田町で紅花が産業として全く成り立っていないことがデータからも明らかになりました。**私がこの町を復活させるために紅花商品を開発し、紅花の一大産地にしてみせます。**更に私は町の魅力を探し始めました。そして、「蔵」にたどりつくのです。ここに新たな光を見出すことになります。

3 村田町の歴史

「じいちゃんこれ何？」私が薄紅色に染まる布を祖父に見せると「そいつは紅花染めだ。昔は紅花で栄えたけんど、今は誰もしらねぇ」と悲しそうな顔で話してくれました。紅花の歴史を調べると、伴い取り扱い大正時代に高価な紅花加工産業が発達し「紅花商い」と呼ばれ繁栄を極めていました。しかし、明治１５年を境に化学染料の普及に伴い取り扱いは減少し続け、町一番の産業は静かにその幕を閉じたのです。紅花は今でも天然色素として様々な商品に使われています。私はこの紅花産業をもう一度復活させようと決意しました。

紅花染め

紅花古文書

紅花畑

紅花商品

4 紅花栽培で「紅」に

まずは紅花栽培です。祖父の土地を借りて牛糞堆肥で土作りを行い播種、間引き、土寄せを行い7月に開花しました。

８分咲きの紅花を朝霜が残る早朝から収穫です。夕焼け空のような黄丹色は本当に美しいです。がくが混じらないように全て手摘みで行いますが、刺があり手は傷だらけになります。軍手をして摘み取った花弁を何度も何度も水洗いして、わずかに含まれる１％の色素を取り出し、濃い色を抽出するために５つの工程を経てやっと得られるのが「紅」です。

棘が多い

牛糞堆肥

乾燥花弁

収穫後の花弁

5 「紅」の商品開発START

「紅」を使い地元かねしょう商店店主大沼悦子さんに紅花染を教えて頂きました。紅液はうめぼしの様な深紅ですが、クエン酸を加えると化学反応で優しい桃色になります。布に模様をつけるためにビー玉や輪ゴムで布を縛り、紅液に漬け込むことで完成。初めは漬ける時間が短すぎて満足する色が付きませんでした。試行錯誤を重ね24時間漬け込むと、求める色に近づき、まるでソメイヨシノの様な色合いになったのです。大沼さんは「紅花の素晴らしさを伝えて欲しい」と熱い想いを聞かせて頂き、新たな気持ちになりました。

紅は古より魔除け紅として神社のお守りやお札等の神事にも利用されていました。更に天然色素として口紅が商品化していたことを知り「口紅」を作る事を決意。更に村田町らしさを探すと、ふと目に入ったものが町に並ぶ「蔵」です。江戸時代に紅花の保存庫として使用され重要伝統的建物に認定されています。黒い瓦を打ち付け、目地に白い漆喰で格子状に作られた海鼠壁を特徴としています。じいちゃんに聞いてみると「釘穴は見えないし、中の物をしっかり守んだぞ」と教えてもらい、当たり前の風景だったものが宝物だと気づき、蔵造りを口紅ケースに取り入れることを考えました。

海鼠壁

村田町の蔵

6 KuraVeni完成

「紅」から実際に口紅を作りました。ケースには海鼠壁と同様に凹凸を付けました。この二つを合わせて出来た商品が「KuraBeni」です。実際にお客様に塗ってもらうと「市販されているのと違い、深い輝きがあるね」と高い評価を頂きました。化粧用巾着には大沼さんに教えて頂いた紅花染めを使用することで町の特産物で作られた唯一無二の商品となりました。1個の価格は6000円に設定し、ネット販売を行い、アンケートを取ることで更に商品価値を高めていきます。KuraBeniだけに留まらずアイシャドウやチーク等の商品ラインナップを増やし「紅花商い」を復活させます。今後は全国へ発信するためにボランティアアワードに応募し予選を突破したいです。全国大会で広めることで全国の同じ意識を持つ仲間を募り、メディアに取り上げてもらい、KuraBeniを道の駅村田や仙台駅と仙台空港で販売し、観光客はもちろん、地元にも紅花商品をもっと広めていきます。

海鼠壁

×

紅

＝

道の駅村田

紅花染め

最後に…

商品開発で様々なことに挑戦すると紅花や、蔵の存在の歴史を知ることができました。今まで以上に自分の暮らす町の魅力に気づき、誇れるようになったのです。当たり前の風景なんて何処にもありません。目の前にあるものは先人が紅によって色付けしてくれた貴重な景色なのです。これを失わない為に紅の商品開発を続けるため、高校卒業後は村田町役場で勤め、町の発展のために仕事をします。いつかは広大な紅花畑を復活させ「紅花商い」と呼ばれる日が戻るまで諦めません。7月、朝日に照らされる紅花は勇気を与えてくれる。例え花弁に棘があっても町を照らす太陽になると信じて紅と共に前へ進み続けます。最後まで読んでくれて感謝します。ありがとうございました。